

19世紀フランスにおける カトリック若者運動に関する覚書

— 社会事業と学習集団の関わりで —

上 垣 豊

▶キーワード

フランス・カトリック青年会、
サン＝ヴァンサン＝ド＝ポール協会、
カトリック労働者サークル事業団、
コンフェランス、聖母信心会、
若者運動、イエズス会

▼要 旨

本稿は、19世紀のフランスにおけるカトリック若者運動について、近年の研究をもとに、社会事業と学校教育との関わりで、概観を試み、研究上の課題を整理しようとしたものである。1886年に創設されたカトリック青年会（Association catholique de la jeunesse française、以下ACJFと略）はカトリックの自律した若者運動として、その後大きく発展する。本稿ではACJFの創設と、それ以前からあったサン＝ヴァンサン＝ド＝ポール協会（Société de Saint-Vincent-de-Paul、以下SVP協会と略）やカトリック労働者サークル事業団の影響関係、系譜関係を探り、イエズス会の関与も含め、ソシアビリテ（社会的結合関係）の変容という視点からカトリック・エリートの若者運動を検討し直した。その結果、学習集団としてのコンフェランス（conférences）、イエズス会経営学校内に組織された聖母信心会の重要性、俗人とカトリック教会との関係の見直し、SVP協会の民主的な組織にたいして、サークル事業団の軍隊的規律の問題などが、課題として浮かび上がってきた。

はじめに

ドイツ、イギリスに比べて近代フランス、とくに近代的な団体 (association) として組織された若者運動の研究は日本にはあまり紹介されていない。フランスでも研究は余り進んでおらず、たとえば、19世紀フランスにおける学生団体の本格的な研究は遅く、2002年のピエール・ムリネ (Pierre Mouliner) の研究が最初であろう¹⁾。若者あるいは学生の政治参加そのものは復古王政期 (1814-30) から存在するが、ドイツのような学生組合は存在せず、19世紀では長期にわたり学生団体が事実上禁止状態にあったため、組織化された学生運動が増加するのは第三共和政 (1870-1940) に入ってからのことにはすぎない²⁾。その他の若者運動についても、宗派的な若者運動についてショルヴィらの研究がある程度である。一般に近代フランスの若者運動は、イギリス、ドイツなどの後塵を拝する傾向がある。たとえば、1835年にロンドンに生まれたプロテスタント系の若者運動YMCAのフランス版であるキリスト教青年同盟 (Union chrétienne de jeunes gens) の最初の組織は1843年にできている³⁾。20世紀に入っても、ボーイスカウト運動、ユースホステル運動などのようにイギリスやドイツの若者運動が先行し、フランスの若者運動はそれに影響を受けることになる。

そのなかで、19世紀末のカトリックの若者運動は、社会党系や共産党系の若者運動に先駆けて民衆の若者の組織化に成功し、エリートの若者運動の枠を超えて、大衆的な運動に成長した点で注目に値する。ボーイスカウト運動や林間学校ないし臨海学校 (colonie de vacances) のなどの活動で他の世俗派や社会主義、共産主義の若者運動と伍し、いくつかの点では先駆的な成果をあげている⁴⁾。本稿で取り上げる、1886年に成立したACJFはその代表的な組織である。この組織は以下に述べるように年齢制限があり、大人あるいは年長者の指導を受けながらも若者が自律的に運営する組織であり、若者運動としての要件を満たしている。しかも、エリートだけでなく、労働者、農民の若者を糾合した大衆組織であった。ACJFは、一九世紀末から戦間期にかけて大きく発展し、ACJFからは10人ほどの司教とほぼ同数の大臣が出ている⁵⁾。ACJFの成立期を研究したシャルル・モレットによれば、まだ若者運動という言葉が生まれる以前に、若者運動を志向した運動であった⁶⁾。

19世紀末に組織化されるカトリック若者運動の特質を明らかにするために、本稿では、19世紀前半から展開される貴族・ブルジョワのカトリックの若者による慈善事業、およびカトリック青年労働者を対象とした社会事業とACJFとの連続性と断絶面を検討することにしたい。ACJFの成立以前にカトリックの若者が積極的に関わった団体としてSVP協会とカトリック労働者サークル事業団 (Oeuvre des cercles des ouvriers catholiques、以下「サークル事業団」と略) を取りあげ、成立過程を中心に検討する。前者は1870年以前のカトリック慈善事業で中心的な役割を果たした団体であり、またACJFの成立に大きな役割を果たしたアルベール・ド・マン (Albert de Mun) が若い頃に関わっている。後者はそのド・マンが中心となって設立された団体で、ACJFと直接的な系譜関係があり、1886年の規約にも第2条に「カトリック労働者サークルの推進によって」生まれたとある⁷⁾。両者とも、カトリックの慈善事業や社会事業の枠組みの中でこれまで論じられてきたが、すくなくともその初期においてはカトリックの若者の運動としての性格を有している。SVP協会やサークル事業団の経験を踏まえて、かなり大きな大衆組織を作ることができたのである。ここでは社会事業のほかにも大学あるいは中等学校の教育

と、どのような結びつきをSVP協会、サークル事業団、ACJFがもっていたかも明らかにしたい。

なお、日本における主要な先行研究を紹介すると、1980年代に西川知一氏が社会事業との関係でサークル事業団を取り上げており、その後、21世紀の初頭に、横原茂氏が学位論文の中でこれらの団体を含めカトリック結社の歴史を概観している。本稿は横原氏の論考と用いている文献も含め、重なる部分が多い。本稿では横原氏の著書以後の研究の発展を踏まえながら、若者運動の側面を中心に、とくに大学を含めて学校教育との関連やイエズス会との関係に注目して検討を加えることにしたい。また、前田更子氏がリヨンについてSVP協会のコンフェランス (conférences) と呼ばれる支部組織やイエズス会経営学校の生徒を対象に組織された聖母信心会について紹介しているのが、新しい研究動向として特筆される⁸⁾。本稿では、前田更子氏が言及したSVP協会のコンフェランスと聖母信心会をより大きな歴史的コンテキストの中に位置づけることを目指している。なお、政治的傾向やカトリック教会内の諸潮流との関係は重要な問題であるが、本稿では捨象し、カトリックの若者のソシアビリテの問題に焦点をあてることにする。

本稿は予備作業の段階にすぎないものであり、依拠する文献もアルベール・ド・マンの『私の社会的使命 (Ma vocation sociale)』⁹⁾などを除けば、シャルル・モレットによるACJFの研究、フィリップ・ルヴィヤン (Philippe Levillain) によるアルベール・ド・マンに関する研究、ド・ラヴェルネ (Mattieu Brejon de Lavergnée) によるSVP協会の研究¹⁰⁾など、主に二次文献であることをあらかじめ断わっておく。

1. サン＝ヴァンサン＝ド・ポール協会

近年までSVP協会は掘り下げた研究の対象ではなかった。初期社会カトリシズム研究の最初の本格的な研究として知られるジャン＝バチスト・デュロゼルの著書では、政治思想史研究であるため、協会の実態には関心がなく、しかもSVP協会を社会事業とは異なる慈善事業としてあつかったため、あまり高い評価が与えられなかった¹¹⁾。その後、司教区を単位とした学位論文が1960-1990年代に増加し、そのなかで慈善事業が取り上げられるようになった。こうした学位論文によってSVP協会はCongrégation (Congrégation) に遡り、それを通して、17世紀の篤信派 (dévots) の慈善事業にまでさかのぼる系譜関係の中に位置づけられることになった¹²⁾。Congrégationとは、かつての聖母信心会をモデルに1801年2月、元イエズス会士の指導のもとに結成され、二年のうちに109名を擁すまでに急速に成長した慈善団体である。多くが学生であり、三分の一が医学生であった。貴族とブルジョワ上層の若者を惹きつけ、1809年には385名に達していた¹³⁾。復古王政期には、その存在が第二次世界大戦後まで匿されていた過激王党派 (ultra-royalistes) の政治的密結社「信仰の騎士団 (Chevaliers de la Foi)」と混同されたため、Congrégationとイエズス会に対する恐怖感を募らせることになった¹⁴⁾。

SVP協会は無から創造されたものではない。Congrégation、とくにその下部組織である学習組織の「ボンヌ・ゼチュード協会 (Société des Bonnes Études)」、慈善事業をおこなった「ボンヌ・ズール協会 (Société des Bonnes Oeuvres)」と明白なつながりがある。カトリクス・デュプラはSVP協会を、設立当初、エマニュエル・バイイ (Emmanuel Bailly) が主宰し

ていた「ボンヌ・ゼチュード」の「正確なレプリカ」でしかなかったとしているが、ラヴェルネからは異論がだされている。王政復古の事業団との系譜関係は否定できない¹⁵⁾にしても、コンフェランスという独特の学習集団を介在させて検討すべきであろう。

ここで言うコンフェランスとは七月王政初期にカルチエ・ラタンに数多く存在した、法職、行政職、政治的キャリアへの準備をするための学生討論会 (joutes oratoires) のことである。こうした「学習集団」は、政治家志望の者や、より一般的に、公的な場で一定の役割を果たしたいと考えた若者にとって「避けては通れない道 (passages obligés)」になっていた¹⁶⁾。コンフェランスのうち、もっとも有名だったのが歴史コンフェランスである。SVP協会の創設メンバーが知りあったのはこの種のコンフェランスのひとつ、レストラパード広場にあったパンシオン・バイイ＝レヴェク (pension Bailly-Lévêque) の歴史フェランスであった¹⁷⁾。バイイは七月革命によって一時消滅していた歴史コンフェランスを1831年にはすでに復活させている¹⁸⁾。ここでは、毎週、歴史、文学、哲学について論戦が行われたが、そこにもう一つ別のタイプのコンフェランス、愛徳コンフェランス (conférence de charité)、すなわち慈善活動を行うコンフェランスが生まれた。1832年11月から1833年6月までの間に歴史コンフェランスに加わっていた78名のうち、28名、35%以上が愛徳コンフェランスに加わった¹⁹⁾。

SVP協会は1833-35年に設立された後、おおよそ40年間、フランスの慈善事業の筆頭の地位を占め、その間に、それに続く大半のカトリック団体の母型が形成されていくのである²⁰⁾。SVP協会の設立時期については、シオルヴィとラヴルネは、間の区切り方は異なるものの、1833年4月23日から1835年12月8日までとしている²¹⁾。最初の会合が行われた1833年4月23日に集まったのはバイイの他、6名の学生であった。バイイを除く6人は1810年から1814年にかけて生まれており、ジャン＝クロード・キャロン (Jean-Claude Caron) の言う「ロマン主義世代」に属している²²⁾。その時にグループの呼称として「コンフェランス」が採用された。実際には慈善活動団体であるのに、当時いくつもあった学生の勉学のための会合をあえて名称に選んだのは、当たりさわりのない名称を採用することによって、コングレガシオンやボンヌ・ズーヴルが復活した印象を与えないようにする配慮からであった²³⁾。

SVP協会のコンフェランスの基本的な事業は、貧者の家の訪問であった。貧者の家の訪問はボンヌ・ズーヴル協会あるいは愛徳姉妹会の慈善活動を受け継いだものである。各会議の初めに与えられる「通常の救援物資」——パンの現物給付券——が援助の基本をなしているが、少しずつ「臨時救援物資」の名前で——金銭あるいは衣服の援助——施しものを多様化していく²⁴⁾。

1835年12月8日に『SVP協会規約²⁵⁾』の採択によって、協会を複数の異なるコンフェランスからなる団体に組織替えることが最終的に決定された。バイイによる『規約』の発表が1833年4月23日から1835年12月8日までにわたる、創立期を締めくくる最後の行為であった。『規約』制定以前は、コンフェランスには副会長しかおらず、愛徳コンフェランスはセクションに分割されていても一つであり、会長のバイイが全体を統括していた。1835年の『規約』によって複数のコンフェランスの存在が認められ、名前にはそのコンフェランスが所在する小教区の名前がつけられ、それぞれのコンフェランスに固有の会長を指名することによって、各コンフェランスは本物の自律を得ることになった。それまではバイイがすべてのコンフェランスの会長であったので、単一のコンフェランスの支部としてみなされていた²⁶⁾のである。

『規約』は、会の精神・目的を記したものであるが、「キリスト教的友情 (amitié chrétienne)」

(p.17) という表現からは、フランス革命後のソシアビリテの変容の影響がカトリックの団体にも及んでいることが分かる。俗人の団体で、大半は若者であると書かれている (p.20) が、年齢規定は存在しなかった。また、カトリック聖職者への絶対的服従も明文化されていた。宗教当局との関係では、バイイはかなり早くから活動を司祭に定期的に報告し、小教区の聖職者と、大きくなっていくコンフェランスとの関係を円滑にしようとした。独立と、聖職者に対する恭順がコンフェランスの変わらぬ規則であった²⁷⁾。

『規約』制定以後は、二つの極を持つかなり柔軟で民主的な組織になった。一方の極にはコンフェランスがあった。最終的に権力が所在していたのはコンフェランスであり、コンフェランスは臨時会議に代表を送り、そこでSVP協会総長 (président général) が選ばれた。ただし、総長は任期10年だったので、この民主的色調を最も表しているのは総会 (assemblées générales) であった。総会はコンフェランスの代表者の組織であり、指導会議がとった決定を総長が知らせる場であった。ただしコンフェランスの自律は相対的なものであった。というのは、総長は、コンフェランス会長を指名する権利を保持していたからである。総長はもう一方の極であり、二つの会議 (Conseil) のトップに位置し、副総長一人と会計一人が補佐して、通常会議 (Conseil ordinaire) を構成した。状況が求めれば、臨時指導会議 (Conseil extraordinaire de direction) を開いた。1839年の規約改正で通常会議は総会 (Conseil général) に、臨時指導会議はパリ会議 (Conseil de Paris) にそれぞれ改組された。初期の学生会員にとって総長バイイは父のような存在であった。時々、よき父として総長はコンフェランスの会議 (séances) に参加した。それぞれのコンフェランスは総会で活動報告を行い、新しい会員は書記長に呼び出されて協会全体に紹介された。当時の書記長のド・ラ・ペリエール (Paul Brac de La Perrière) は1837年、メンバー全員のリストを作成し、それを全てのセクションに伝えている²⁸⁾。

SVP協会は1835年12月の時点で250人の会員がすでにいたが、フランスで大きな成長を遂げる。ラヴェルネによると、1872年までの間、総計1765のコンフェランス、年平均にして44.1の加入が認められている。しかしながら、SVP協会に公的認知 (reconnaissance publique) を与えようとしたペルシニ内務大臣の通達 (1861年10月16日付け) を拒否したため総会 (Conseil général) はフランスでは法的存在を奪われ、それ以降はコンフェランスの加入を認めることができなくなった²⁹⁾。

ラヴェルネは、1831-1871のパリのSVP協会会員 (confrères) のなかから、総計809名の資料体 (corpus) を作成し、分析を行っている。資料体のなかで、最初に指導的地位についた時の職業では、学生であった者は105名で14.7%にすぎない。SVP協会の会員は次第に年齢が上昇していった。最初は学生団体として始まったが、年齢制限がなかったため、若者集団としての性格が失われていったものと考えられる。指導的な地位に達した学生の割合は1847年までわずかながら減り、1850年代に急速に低下し、第二帝政下にはコンフェランスの「名士化 (notabilisation)」が生じている。青年弁護士で指導的地位についている会員も1840年代にはいなくなっていた³⁰⁾。

第三共和政になると、SVP協会が慈善事業の前面をほぼ単独で占めていた時代は終わりを告げる。1871年12月に、カトリック労働者サークル事業団が発足した。サークル事業団を創設したアルベール・ド・マンとその仲間はいったいこの場合パリのコンフェランスやパトロナージュで慈善活動の第一歩を飾っている。SVP協会のコンフェランスはサークル事業団、サクレ＝クール全国請願 (voeu national au Sacré-Coeur、1870年から1871年にかけて繰り広げられたサク

レ＝クール教会建設請願運動のこと)、カトリック委員会 (Comités catholiques)³¹⁾ などのすべてのイニシアチヴに関わっていたという³²⁾。

2. カトリック労働者サークル事業団とアルベール・ド・マン

この章では、主に、アルベール・ド・マンの『私の社会的使命』とルヴィヤンの研究に依拠しながら、サークル事業団の組織のあり方と若者の関与の問題を検討してみることにする。アルベール・ド・マンは1862年にサン＝シール (Saint-Cyr) 陸軍士官学校を卒業し、アルジェリアで数年間勤務した後、1867年の初めにフランスにもどって結婚し、クレルモン＝フェランの駐屯部隊に配属され、そこで初めて、労働者向けの事業、具体的には若者パトロナージュ (patronage) と出会っている。クレルモン＝フェランの若者パトロナージュはこの都市の SVP 協会のコンフェランスによって設立されたものであり、ド・マンはコンフェランスに加わって、パトロナージュの活動に参加することになった³³⁾。パトロナージュとは七月王政期 (1830-1848) に最初に設けられた、民衆の若者の信仰を有害な影響から守るための場所 (lieu de préservation) であり、対象は初聖体拝領を終えて、工房や工場のなかの大人の世界に入っていた徒弟であった。もともと青年を対象としていたが、1881-1882年のフェリー改革によって初等教育が大きく変貌し、ライシテ (laïcité) を原則とする義務教育が施されると、年少の生徒にも対象を広げていくことになる³⁴⁾。

普仏戦争の敗北とパリ・コミューンの衝撃を受けて、ド・マンは社会問題に取り組む必要性を感じた。このころ、モンパルナス大通りに、「青年労働者のサークル」があった。それは、サン＝ヴァンサン＝ド＝ポール修道会が設立したパトロナージュとしては最も古く、最も盛んであったものの一つである、ナザレ徒弟の大パトロナージュに付属していた。パトロナージュとサークル³⁵⁾の間には緊密な関係があったが、ド・マンはパトロナージュと青年労働者のサークルのソシアビリテの違いを明確に認識していた。ド・マンによれば、パトロナージュは子どもと年齢の低い若者からなり、運営は、内部の統治と同様に指導員 (directeur) と、彼を援助する人々の手に留まっていた。後者のメンバーは徒弟の状態を抜け出た労働者であり、家父長的な監督の任務しかもっていなかった。サークルの会長は仲間によって選ばれた労働者であり、同様にして指名された労働者の会議がサークルを運営し、会費を処理した。サークルはパトロナージュと同様にカトリック的な性格をもっていた。施設には礼拝堂があり、施設付き司祭が絶えず相当な宗教的影響力を行使していた。しかし、古い形のパトロナージュに代わって新しい組織になっており、その目的は若者固有のイニシアチヴにまかすことによって、キリスト教的使徒的活動の監督的作用を延長することであった。ド・マンによれば、当時のすべての芽生えようとしていた社会運動はこのように、労働者の若者にイニシアチヴを任せようとする点に特徴があった³⁶⁾。

聖ヴァンサン＝ド＝ポール修道会は1845年に、SVP 協会のチャリティ活動の中から生まれ設立された修道会であり、次第に民主的となっていく社会の要請に応えるため労働者事業に対する指導員養成を目的に掲げていた。司祭と単なる修道士からなり、後者は俗人の服装をし、指導員の職務を果たさなければならなかった。司祭は団体つき司祭の職務に限定されていた³⁷⁾。モンパルナスのサークルの指導員はモーリス・メニャン (Maurice Maignen) であった³⁸⁾。モーリ

ス・メニャンはサークル、すなわち外から来る労働者のための質素な部屋のひとつに住み、SVPのコンフェランスを主宰し、そこにはサークルでは賃金だけが唯一の収入である若者たちが夕方や日曜日に彼らよりも貧しい人々に対して愛徳の任務を果たしにいていた。サークルの会長は錠前工であった³⁹⁾。

ド・マンとルネ・ド・ラ・トゥール・デュ・パン (René de La Tour du Pin) らは、モンパルナスの労働者サークルに着想を得て、パリの全ての街区に同じようなサークルを作ることにした。まず手始めに、まだ敗北した蜂起の記憶もなまなましく、社会問題があらわに見えるベルヴィルとモンマルトルに作るようになった。1871年12月23日、夜8時ごろに、サークル・モンパルナスのヴリニヨ (Vrignault) の質素な部屋に集まった。これが設立の会議とされる⁴⁰⁾。

『誤謬表 (Syllabus)』への支持を理由に自由派カトリックのデュパンルー猊下 (Mgr Dupanloup) から非難されたが、宗教的絆のおかげでサークル事業は博愛的あるいは政治的誘惑から守られ、野心家や物見高い人々、フィラントロープ (博愛家)、社会的治療策の発明家から守られ、そのおかげで長年にわたり事業は活動的なカトリックの最も強力なアソシアションであった、とド・マンは述べている⁴¹⁾。

ベルヴィルではプチ (Petit) 師が20人ばかりの、20歳から25歳までの、大半が小さな工場の職人労働者をリクルートするのを手伝った。1872年4月7日日曜日、サークルの開会式でド・マンは創設演説を行っている。1872年春、サークル委員会に、神学者、社会学者からなる研究会議 (conseil d'études) が設けられた。委員会は会議にキリスト教社会のプランを作成するように依頼した⁴²⁾。ド・マンらは、パリの民衆街区に冊子、ちらし、キリスト教関係の出版物を普及し、革命派に対抗して、公開集会を組織し、司祭に教会でとくに労働者に向けられた講演をさせてくれるように提案した。最初の講演は1873年1月11日月曜日夜8時半に礼拝堂で催された。毎週月曜と木曜は大勢の聴衆が詰めかけた⁴³⁾。

使徒的熱意と軍隊的精神がド・マンらを動かしていた。とくに元将校のデュ・パンはその生きた化身であり、軍隊組織を事業に適用しようとした。書記局が規律を維持するうえで役立った。書記局は宣伝、設立、運営、教育の四つのセクションに分かれていた。第2セクションは、もともとパリのサークルを推進するために創設されたものであったが、活動をフランス全体に広げねばならなかった。そのセクションの長は、事業のなかで責任の主な責任を担い、書記長の肩書とともに、共通の仕事を調整することを使命とした。第2セクション (設立を担当) 長は、いわば、議長の権威の元に審議する委員会の首相であり、その他のセクション長はたとえれば閣議を構成していた。この議会的な見かけの下で、書記長が一種の軍隊の指揮権のようなものを持っていた。教育セクションは社会問題研究が担当であった⁴⁴⁾。

地方組織がド・マンらの精力的な活動によって次々と設立された。地方組織はかつての州に従ってゾーン (zones) に分割された。全国組織のゾーンへの分割はACJFにも受け継がれることになる。のちにはゾーンがさらにディヴィジョン (divisions) に下位分割され、それぞれに特別書記 (secrétaires spéciaux) がおかれ、位階制的に組織され、書記局と絶えず連絡をとった。何年もの間、ド・マンは日常的に協力者と業務通達や私的な書簡をやりとりし、一種の家族的共同体を形成した⁴⁵⁾。

イエズス会とサークル事業団の関係については、評価が分かれるところである。1931年刊の著作のなかでルカニュエ神父は、サークル事業団をイエズス会の手の中にあるものとみなしてい

る⁴⁶⁾。たしかにサークル事業団の施設付き司祭は1871年から1909年までイエズス会が供給していた。だが、ルヴィヤンは、イエズス会のパリ管区長からイエズス会総長にあてられた報告を読む限りでは、イエズス会はサークル事業団を王党派の政治目的で結成された団体であると判断しており、イエズス会が事業団を利用しようとは考えていなかった、と論じている。実際、イエズス会はなんども、とくに、政府による未認可修道会にたいする規制強化の危険が差し迫ったものになっていた1879年には、事業団と距離をおこうとしている。イエズス会と事業団の関係では、イエズス会経営のサント＝ジュヌヴィエーヴ (Sainte-Geneviève) 校の校長 (recteur)、デュ・ラク神父 le P. du Lac とド・マンとの個人的関係がむしろ重要であろう。通称「ポスト街 (rue des Postes) の学校」と呼ばれた1854年開設のイエズス会の学校は、サン＝シール陸軍士官学校、理工科学校などグランド・ゼコール入学実績でトップ・クラスであった有名進学校であった⁴⁷⁾。

ド・マンは、1873年にデュ・ラク神父と親交を結び、以来、必ずしも従ったわけではないにしても、神父から様々なアドバイスを受けている。1873年2月2日、ド・マンはデュ・ラク神父に事業団の委員会がすでにある、あるいは設立準備中である都市のリストを送り、サント＝ジュヌヴィエーヴ校のOBにたいする仲介の労をとってくれるように頼んでいる。また1874年には、同校卒業生の陸軍士官学校生徒の会合と理工科学校生徒の会合をそれぞれ組織し、ド・マンはこれらの生徒との親交を深めた。この二つの集まりは二年間続いたという。ド・マンは事業団の活動を行うにつれて、気宇壮大な計画に比して自らの知的陶冶が十分でないことを痛切に感じるようになっていた。同じころ、神父からサント＝ジュヌヴィエーヴ校の校舎内に、ド・マンは部屋を与えられた。ド・マンは、それ以来、頻繁に同校を訪れ、時間が許す限り、そこで読書と執筆を行い、「知性の訓練 (gymnastique de l'esprit)」を行ったのである⁴⁸⁾。

サークル事業団が組織する対象としたのは青年労働者であるが、事業団の幹部そのものは、設立経過からもわかるように、年齢は比較的若い場合でも、すでに社会的地位のあるエリートあるいは名望家であった。1871年12月に出された「熱意のある人々へのアピール」に応えたのは、大半が、ド・マンやラ・トゥール・デュ・パンのように、士官であった⁴⁹⁾。同様に、1873年1月の事業団中央委員会のメンバーのリストには一人も学生はおらず、弁護士、國務院傍聴官などであり、なかでも士官クラスの軍人が27名中8名と最も多い⁵⁰⁾。ルヴィヤンは1872年3月から1873年12月まで設立された地方の21のサークル設立委員会の社会学的な分析を行っているが、それによると232名のなかで聖職者13.9%、地主13.4%、士官8.6%、代議士4.3%、司法官・弁護士・代訴人8.6%、公証人・公証人書記・法学博士5.6%、医者・薬剤師3.0%、卸売商人16.4%、工業家・製造業者7.3%、職人9.0%、地方官吏・地方議員3.8%、その他3.8%となっていた。このように、学生団体として創設され、当初は若者集団としての性格を有していたSVP協会とは異なり、サークル事業団は地方貴族など指導階級に属する大人が労働者の若者を指導する形をとり、いきおい、農村部では城主が農村の民衆を監督する伝統的な人間関係が組織の中に及ぶことになった⁵¹⁾。

1875年以降、土地貴族、伝統的な事業団の名士、さらには聖職者のサークル事業団への熱意が薄れていく。その代わりに事業団はサント＝ジュヌヴィエーヴ校生徒の進学先のサン＝シール陸軍士官学校などのグランド・ゼコールの学生に期待を寄せていく。既存のカトリック事業との関係も複雑で、しばしば妥協しなければならなかった。SVP協会との関係も一概にはいえ

ず、ヴァンヌではSVP協会のコンフェランスから設立委員会が生まれているが、オード県のモンリアルでは、逆にSVP協会の果たしていた役割のために、設立委員会の設置が中断されている⁵²⁾。

3. ACJF の成立

第3章では、シャルル・モレットの研究に主に従って、カトリック青年会の成立過程を、組織面に焦点を合わせながら、おっていくことにしたい。

1880年ごろになるとサークル事業団の活動は息切れし、停滞していく。指導階級からの支援も労働者階級からの支持も陰りを見せていく。モレットによれば、サークル事業団は半ば失敗していたのである⁵³⁾。衰退の要因は、王党派の運動への関与の是非、職業組合への評価などの問題に、ラ・トゥール・デュ・パンらとド・マンらとの派閥的な対立が絡んでおり、小稿では論じつくせない⁵⁴⁾。だが、ソシアビリテの面に限定すれば、サークル事業団の失敗は下記のような理由によった。

ジョルジュ・ウーグによれば、ド・マンは「事業団は、「指導階級」による「指導される」階級の庇護ではなく、異なる階級の代表の間の誠実な協力を打ち立てなければならない」と考えていた。ところが、多くの者は「保護者」としての役割を放棄せず、労働者を監督下に置こうとした。そこから事業団の最終的な失敗が生じたのであると述べている⁵⁵⁾。

モレットによれば、サークル事業団の失敗はカトリック教会が慈善事業、社会事業の領域での俗人のイニシアチヴ一般に対して警戒的であったことに加え、司教団の無理解が一因であった。司教が管轄の司教区内のサークルに司教の権威に従わせようとして、サークル事業団の発展を阻害したのである。サークル事業団は司祭についてのある種の観念をもっており、司祭に教権主義を断念し、霊的な指導者にとどまるよう要求していた。この要請はサークル事業団にとって大きな困難の一つになった。伝統的な教区司祭はこのような司祭職観に慣れておらず、事業団拡大の最も一般的な障害となっていたのである⁵⁶⁾。ルヴィヤンもまた、事業団にたいして、司教を中心として教会には不信感、あるいは無理解が当初から存在していたと指摘している。このため、労働者サークルの組織に必要な指導員を十分確保することも困難になった。というのは、サークル指導員の仕事は、パトロナージュの指導員と同様に、俗人に任せられるような性質のものではない、と考えられていたからである⁵⁷⁾。

ACJFが成立するのは1885年から1886年にかけてであるが、モレットによれば、1885年の時点では、若者を対象としたカトリック事業として、主にパトロナージュと学生のサークルが存在していた。それらはド・セギュール猓下 (Mgr de Ségur) が組織した事業団同盟年次大会 (congrès annuels de l'Union des OEuvres) にも関わらず、組織化されておらず、たがいに孤立していた。ACJFは既存の団体の連合体あるいは連盟として出発する。モレットは、当時存在した団体はどちらかといえば有害な影響から若者を守る場所であったとみなしている。したがってサークル事業団が組織した青年労働者のサークルもパトロナージュと同様であったと彼は評価していることになる。これに対して、ACJFは、萌芽的であっても、社会変革を夢見ており、かなり様相を異にしていたと高い評価が与えられている。ACJFの第一世代は1870年以前に生まれた世代であり、サークル事業団の出身であり、アルベール・ド・マンの周りに集まっていた。やがて地方の若い貴族と学生からなるコンフェランスと呼ばれる団体の枠を越え、と

くに農村世界に、そして程度はより小さいが、都市の民衆階層へも広がっていったという⁵⁸⁾。

サークル事業団と差異化を図るために、ACJFは着想の他の源を必要としていたが、ACJFが設立される前の数か月に、カトリック教皇庁は若者を重視するように信者に勧告していた。たとえば回勅 *Humanum genus* (1884年4月20日)のなかでレオ13世は若者の陶冶と関連してフリーメーソンとその衛星組織について警告を発していた。また、1884年5月27日、レオ13世は小勅書 *Frugiferas* を公表し、そのなかで最初の聖母信心会の教会法による設立300周年を祝うように奨励していた⁵⁹⁾。

ド・マンは1885年2月12日、ベルギーのルーヴァンで、学生全国協会 (Société générale des étudiants) で演説し、社会問題の研究と解決を訴え、大きな反響を起こした。これに力を得たド・マンはフランスのカトリックの若者のなかに類似の運動を起こし、組織しようと考えた。運動を指導する能力のある若者を探す必要があったが、彼が頼ったのはイエズス会のデュ・ラク神父であった。デュ・ラク神父は、イエズス会がフランスから1880年に追放されていたため、当時はイギリスのカンタベリー校の校長であった。神父の推薦に基づいて、彼がコンタクトを最初にとったのはカンタベリー校のOBである、ロベール・ド・ロクフィユ (Robert de Rocquefeuil) であった。ロベールは、サークル事業団の創設期のメンバーであり、ド・マンの友人でもあったフェリックス・ド・ロクフィユの息子であった。スイスのフリブールで1885年10月21日から23日にかけて開かれたカトリック社会経済研究国際連盟 (Union internationale catholique d'études sociales et économiques) 第1回会合に出席した後、ド・マンはカンタベリー校に行き、神父と語り合っている。こうしてド・マンとつながりを持った若者たちはイエズス会と、一方ではカンタベリー校のOBとして、他方では若者の信心会のメンバーとして繋がりをもっていた。ロベールは、1882-1883年度、カンタベリー校の聖母被昇天信心会の会員でもあった。代夫の役割を担ったサークル事業団と多方面に影響力をもつイエズス会、この二つの結びつきがACJFの独自性となった。サークル事業団の1886年1月27日の議事録には、ACJFの最初の会長、および書記局のメンバーと施設付き司祭の名前が記されていた。このようにして、ACJFはサークル事業団のなかに生まれたのである⁶⁰⁾。

毎週の集会は通常土曜日の朝に開催された。3月3日、サークル事業団委員会はACJFの最終的な土台の通告を受け取っている。3月10日、ACJFはサークル委員会事務局に「熱意のある若者へのアピール」と「学習計画 (programme d'études)」を提出した。学生の一部の注意をひきつけたのはむしろ「学習」の側面であった。加入の返事を送ったのは既存のコンフェランスである。このコンフェランスがSVP協会のコンフェランスであるかどうか、モレットは明記していない。ACJFの第1回総会は1887年5月1日、2日にアンジェで開催され、47の地方集會 (réunions de province) の支持を受けた。この大会ではコンフェランスのそれぞれがバリの委員会 (Comité) にすくなくとも学習計画に合致した研究成果を会報に送らねばならないことになった。ACJFは組織された集団の連合であることを望み、組織された集団がない場合は、プロワのように新たに組織を作ることになった。ACJFは1886年2月に8人で始まったが、1886年10月には400名、1887年5月1日～2日のアンジェ大会では22コンフェランス、790名、1889年6月3～5日のパリ大会の時に3000名、大半が57のコンフェランスのいずれかに属していた。1891年4月のリヨン大会では5000名の会員を集める70のコンフェランスにまで成長した⁶¹⁾。

1886年の規約第6条、第7条には正会員 (membre actif) となるためには「古典学習」を修

了していなければならないことが明記されている。ここからわかるように、正会員およびその候補は古典人文学教育をほどこすエリート養成の中等学校生徒ないしはその卒業生に限定されていた。他方、明確な年齢規定は存在しなかった。その一方で、ド・マンはロベール・ド・ロクフィユと密接な連絡をとり、ACJFの大会でも講演しているが、執行部にあたる委員会には加わっていない。外部の大人の指導を受けながら、ACJFは若者の自治組織として出発したのである。それに対して1889-1891年の「一般規約」には、II章第5条に「学校の上級クラス (classes supérieures) の生徒も加入できる」とあるが、「古典学習」修了要件は明記されていない。他方、満30歳になれば能動会員の資格を失い、名誉会員になる (第12条) とされ、明確な年齢規定が存在している⁶²⁾。

4. イエズス会の役割

最後に、一部重複するが、ACJF創設におけるイエズス会の役割を検討してみよう。第三共和政初頭のマクマオン大統領のもと、イエズス会は5千人のフランス人修道士、30のコレージュ、1万1千人のコレージュ生徒を擁し、ジャン・ラクチュールの表現を借りれば「17世紀、18世紀と同様に、指導階層の教育を支配しようとしていた⁶³⁾」。イエズス会の神父の影響力はACJFの設立と初期のメンバーのリクルートと無縁ではなかった。ACJFが自ら設立の日としている3月29日は、イエズス会経営学校の生徒にとっては、1880年3月29日のデクレ、すなわち未認可修道会迫害のデクレの記念日であった⁶⁴⁾。

初代の施設付き司祭はイエズス会士ではなかった。初代のACJFの司祭は、モーリス・メニヤンの甥でモーリス同様サン＝ヴァンサン＝ド＝ポール修道会士のシャルル・メニヤン師 (Charles Maignen) であった。だが18ヶ月後、ド・マンはイエズス会に頼ることにした。モレットは、おそらくそれがACJFの存続を可能にした要因であろうと述べている。一方では、地方組織が所在地の司教にあまりにも従属していると全国組織が存続できなくなるおそれがあった。他方では、教義の面でカトリック界全体に対して先進的であることを示す必要があった。イエズス会はローマ教皇庁によって認められた修道会であり、司教の権威には縛られない。またその知的・道徳的権威は広く認められていた。このような事情から、ド・マンはイエズス会に頼る道を選んだのである⁶⁵⁾。

1887年の第1回総会では霊的絆を強化する配慮も強調された。こうして、それぞれのコンフェランスは亡くなったACJF会員のために追悼ミサを行い、指示された祈りの暗唱をすることになった。この総会のすぐ後で、デュ・ラク神父を中心に30～50名の若者が黙想会を行った。この時に、デュ・ラク神父は、ACJFの委員会のメンバーから、ロベール・ド・ロクフィユが二度にわたってACJF内に信心会を作ることを認めさせようとしたが、少数の支持しか得られなかったことを知らされている。他方で、ロベールは神父に「管区内のいくつもの都市で、信心会が作られてACJFは二重の組織になっている」と話していた⁶⁶⁾。8月に入って、ド・マンはACJF委員会付き司祭の件でイエズス会の管区長に働きかけている⁶⁷⁾。

ここでイエズス会が創設したコンフェランス・オリヴァン (Conférence Olivaint、以下 Conf O と略) について、簡単に説明しておこう。このコンフェランスはカトリック教会に奉仕する雄弁家の養成を主要な目的にしていた。この点では19世紀前半にカルチエ・ラタンで弁論術を

磨くために設けられたコンフェランスの伝統を引いている。会の名前の由来となっている Pierre Olivaint は、パリ・コミューンの時に殺害されたセーヴル街にあるイエズス会本部の上長である。Conf O は1875年にイエズス会の指導下にあるセーヴル街の聖母信心会によって創設された。この聖母信心会はもともと、イエズス会が経営した中等学校、ヴォジラル校 (collège Vaugirard) のなかに同校生徒を対象にして1852年に創設され、1860年代にセーヴル街に移転していた。パリ・コミューン後、いくつもの学生コンフェランスを生み出している⁶⁸⁾。

イエズス会は1874年に七月王政期の「ボンヌ・ゼチュード」の例にならって、聖母信心会に属する若者のために討論と会合のための学生コンフェランスを創設することを決め、これを受けて1874年にセーヴル街の聖母信心会は様々なコンフェランスに図書室と会議室を含む場所をセーヴル街で提供することを申し出た。そこに集まったいくつかのコンフェランスが統合して成立したのが Conf O である。Conf O とセーヴル街の聖母信心会との結びつきはとりわけ緊密であった。聖母信心会のメンバーだけが Conf O の会員になることができ、したがって Conf O のすべてのメンバーは信心会の規則に従っていた。ド・マンもこのコンフェランスの初期からの支持者の一人であった。ド・マンは、1885年6月24日の閉会セレモニーの際に、来賓として招待され、カトリシズムと教会の擁護のために運動に参加するように会員に促している。こうして Conf O の何人ものメンバーが ACJF の設立に参加したのである。また、数年前から元副会長のシャルル・ジョフロワ・ド・グランメゾン (Charles Geoffroy de Grandmaison) がド・マンの特別秘書となっていた。さらに、1885年11月、Conf O の書記の一人、ジョゼフ・ド・ヴァランス (Joseph de Valence) がド・マンの政治秘書となった。Conf O の会員は個別に ACJF に加入していたが、会自体が ACJF に加入するのは1888年1月と、すこし遅れている。ちょうど、イエズス会が ACJF の霊的指導を引き受けることになった時であった。なお、Conf O は既婚男性は退会するのが決まりで、SVP 協会のコンフェランスとは違い、未婚男性の団体であった⁶⁹⁾。

終わりに代えて

本稿では、SVP 協会の設立から ACJF の設立までを、カトリックの若者、とくに中等教育以上の教育を受けたエリート層の若者のソシアビリテの変容という点に注目して検討を試みた。本稿は予備的作業にすぎないので、カトリックの若者運動研究の課題を整理し直すことで、結びにかえたい。

一定の年齢集団に限定された、若者による自律的な組織による運動という意味での若者運動は、カトリックについては ACJF が最初である。それまでのカトリックの運動は、若者によって創始されたものであっても、年齢制限がないために、次第に若者運動としての固有の性格を失っていった。同時に、ACJF は、聖母信心会や慈善団体の伝統を受け継いでいた。それに19世紀になって生まれた学習集団としてのコンフェランスの伝統も付け加わることになる。学習・研究機能はサークル事業団、さらには ACJF に受け継がれていく。ACJF は政治団体ではなく、若者の教育を目的とした団体であった⁷⁰⁾。また、1886年の規約には明確な年齢規定はないが、「古典学習」修了、すなわち、中等教育修了を要件としており、ナポレオン時代に確立したエリート養成の学校教育へのカトリックの順応を示している。同時に、十代後半の青年が大部分除外されていたが、1890-1891年の規約では、これが改まり、年齢規定が導入され、「古典学習」

修了要件がなくなり、「上級クラス」の生徒は入会可能として、十代後半の若者の加入に道を開いている。このように、対象とする若者層については試行錯誤が続けられていたことが分かる。また、SVP 協会はかなり民主的な組織であったが、サークル事業団は、下部組織の実態はともかく、形の上では、中央集権的で書記局の権限が強く、軍隊的規律を特徴としていた。これにたいして、ACJF は中央の書記局の構造はサークル事業団とよく似ているが、既存の組織をそのまま加盟させる形をとっており、ゆるやかな絆で結ばれた連合体であった。サークル事業団と ACJF との組織面での違いは、今後の検討課題であろう。

また、イエズス会の関与の仕方は改めて再検討される必要がある。ド・マンは1870年代初めからイエズス会経営学校の校長と親交を結ぶが、それはエリートの苗床であった在校生や同窓生に張り巡らされたイエズス会のネットワークだけでなく、イエズス会の知的権威によるところも大きかった。七月王政期の SVP 協会の設立には、イエズス会は追放されていたため、直接的な関与は認められないが、イエズス会は第二帝政下にパリに学校を開設し、聖母信心会を組織し、第三共和政期にはいると、SVP 協会のコンフェランスの経験に学びながら、Conf O を創設している。本稿では取り上げなかったが、前田更子氏が指摘しているようにイエズス会経営学校で組織された同窓会組織の存在も見逃すことができないだろう⁷¹⁾。デュ・ラク神父がもっていた卒業生とのネットワークなしには、ACJF の設立は考えられないからである。ただし、サークル事業団の施設付き司祭職と同様に、ACJF へのイエズス会の指導は霊的領域にとどまったと考えてよいであろう。俗人と聖職者との関係は大きく変わろうとしていたのである。

イエズス会による若者の組織化については、未解明な部分が多く、そのために部外者に謎めいた印象を与えてきた。Conf O などイエズス会が組織したコンフェランスの解明が進み、同時代の SVP 協会を始め、各種のカトリック団体の研究が進めば、イエズス会陰謀神話もおのずとその効力を失っていくだろう。

注

- 1) Pierre Mouliner, *La naissance de l'étudiant moderne (XIXe siècle)*, Paris, Belin, 2002.
- 2) Pierre Mouliner, «Genèse d'une jeunesse au XIXe siècle. Quand les étudiants devaient rendre des comptes», Ludivine Bantigny et Ivan Jablonka (dir.), *Jeunesse Oblige: Histoire des jeunes en France XIXe-XXe siècle*, Paris, PUF, 2009, p.37. 1865年に、ベルギーのリエージュで第一回学生国際大会 (congrès international d'étudiants) が開催され、72名のフランス人学生が参加している。参加したフランス人学生の大半はブランキ派か、あるいはカール・マルクスの女婿であるラファルグらの新聞 *Rive gauche* の派閥の学生であった。パリ・コミューンの後、カルチエ・ラタンにいくつも学生新聞が現れ、社会主義的傾向の小集団が形成されている。だが、フランスは他のヨーロッパの大学とは違い、学生団体が禁止に近い状態にあったため、当局によって公認された学生組織が生まれるのは遅く、1877-78年にナンシーに生まれた団体が最初で、パリでの公認された団体は、1883年の学生総連盟 Association générale des étudiants (AGEP、通称 «l'A») が最初である。Moulinier, *La naissance*, pp.164-168, 208-211.
- 3) Gérard Cholvy, «Les organisations de jeunesse d'inspiration chrétienne ou juive XIXe-XXe siècle», Id (éd.), *Mouvements de jeunesse chrétiens et juifs: Sociabilité juvénile dans un cadre européen 1799-1968*, Paris, Editions du Cerf, 1985, p.18.
- 4) colonies de vacances については Lee Laura Downs, *Histoire des colonies de vacances de 1880 à nos jours*, Paris, Perrin, 2009を参照のこと。他にアントワヌ・プログが1930年以降のフランス若者運動を概観している。Antoine Prost, *Histoire générale de l'enseignement et de l'éducation, t.IV: Depuis 1930*,

- Paris, 1981, 2004, chapitre 13.
- 5) Charles Molette, *L'association catholique de la jeunesse française 1886-1907: Une crise de conscience du laïc catholique*, Paris, Armand Colin, 1968, p.18.
 - 6) *Ibid.*, p.29.
 - 7) *Ibid.*, p.709, Annex I.
 - 8) 西川知一『近代政治史とカトリシズム』有斐閣、1977年、149-152頁。横原茂『近代フランス農村の変貌——アソシアシオンの社会史——』刀水書房、2002年、第8章。前田更子『私立学校からみる近代フランス——19世紀リヨンのエリート教育』昭和堂、2009年、190-197、222-224頁。
 - 9) Albert de Mun, *Ma vocation sociale: Souvenirs de la fondation d'oeuvre des cercles catholiques (1871-1875)*, Paris, P. Lethielleux, 1908.
 - 10) Philippe Levillain, *Albert de Mun: Catholicisme français et catholicisme du syllabus au ralliement*, Paris, École française de Rome, 1983; Matthieu Brejon de Lavergnée, *La Société de Saint-Vincent-de-Paul au XIXe siècle: Un fleuron du catholicisme social*, Paris, Cerf, 2008.
 - 11) Jean- Baptiste Duroselle, *Les débuts du catholicisme social en France, 1822-1870*, Paris, PUF, 1951, pp.22-24, 165-181.
 - 12) Claude Muller, *Dieu est catholique et alsacien: La vitalité du diocèse de Strasbourg au XIXe siècle (1802-1914)*, Haguenau, Société d'histoire de l'Eglise d'Alsace, 1987, vol, II, p.811. なお17世紀の篤信派については、坂野正則「一七世紀中葉におけるカトリック宣教戦略の再編——パリ外国人宣教会と亡命スコットランド人聖職者——」『史学雑誌』120編10号、2011年10月、65頁、および坂野正則・山本妙子「一七世紀パリにおける篤信家ネットワークの編成——聖体会と貴顕信心会を中心に——」『クリオ』21号、2007年を参照。
 - 13) Jacques-Olivier Boudon, *Histoire du Consulat et de l'Empire*, Paris, Perrin, 2000, 2003, pp.249-250.
 - 14) 拙稿「立憲王政下フランスにおけるイエズス会神話——モンロジエからミシュレまで——」『史林』81巻3号、1998年5月参照。
 - 15) Lavergnée, *op. cit.*, pp.118-119; Catherine Duprat, *Usage et pratiques de la philanthropie : pauvreté, action sociale et lien social, à Paris, au cours du premier XIXe siècle*, Paris, Association pour l'étude de l'histoire de la sécurité sociale, 1996-1997, vol.I. p.482.
 - 16) Anne Martin-Fugier, «La formation des élites: les “conférences” sous la Restauration et la monarchie de Juillet», *Revue d'Histoire Moderne et Contemporaine*, t.36, avril-juin 1989, pp.212-213.
 - 17) Lavergnée, *op. cit.*, p.63; Anne Martin-Fugier, *art. cité*, pp.211-244. 1819年11月、エマニュエル・バイイは学生のためのパンシオンを開き、さらにすでに別の場所にパンシオンを開いていた昔の学友の一人、Georges Martin-Lévêqueと協力して、分業することになった。バイイは学習とコンフェランス、レヴェクは管理運営を担当した。バイイは1793年にパ＝ド＝カレ県に生まれ、1820年にコングレガシオンに、続いてボンヌ・ズーヴル協会に入会し、後者の病院支部 (section des hôpitaux) の長になっている。Martin-Fugier, *art. cité*, pp.212-125.
 - 18) Gérard Cholvy, *Frédéric Ozanam: L'engagement d'un intellectuel catholique au XIXe siècle*, Paris Fayard, 2003, p.240.
 - 19) Lavergnée, *op. cit.*, pp.64-65, 112. レストラパードの歴史コンフェランスの他にも、カトリック学生のソシアビリテの場には、スタニスラス学院 (collège Stanislas)、ソルボンヌでの講義、ラムネー派のグループがあった。ラヴェルネによると、バイイのパンシオンの寄宿生は愛徳コンフェランスのメンバーのかろうじて5%にすぎなかった。パンシオン・バイイ-レヴェクは復古王政期、「ボンヌ・ゼチュード」の限られた数の学生を受け入れた施設であり、これにたいして「ボンヌ・ゼチュード」のコンフェランスは、寄宿生を超えて500人集めていた。この数は、後の愛徳コンフェランスとほぼ同じ規模である。*Ibid.*, pp.65, 73, 104, 110.
 - 20) Lavergnée, *op. cit.*, p.18.
 - 21) *Ibid.*, p.59; Cholvy, *Ozanam*, pp.244-266.
 - 22) Jean-Claude Caron, *Généralisations romantiques: Les étudiants de Paris et le Quartier latin (1814-*

- 1851), Paris, Armand Colin, 1991. 1833年当時、Paul Lamanche, Auguste Le Taillandier, Frédéric Ozanam, François Lallierの四人は法学部の2年生であり、Jules Devauxは医学部の2年生で、Le Taillandierを除いてみんな同じ「カルチエ・デ・ゼコール (学校街)」quartier des Ecolesに住んでいた。Félix Clavéもおそらく学生であったろうが、学部はわかっていない。父が寄宿学校 (institution) を経営するfaubourg du Rouleに住んでいた。出自も地方出身と共通していた。Lamanche、Devaud, Le Taillandierはノルマンディー出身であるが、ClavéとLe Taillandierは父とともにパリに住んでいた。中流ブルジョワジーに属す点も同じである。Lamanche、Ozanam、Lallierの父は医者である。Lamancheの父はofficier de santé (医学博士の学位がなくとも開業できた医師) であったと言われる。Lavergnée, *op. cit.*, p.62.
- 23) Cholvy, *Ozanam*, p.248.
- 24) Lavergnée, *op. cit.*, p.44. そのほかに、貧者のための図書館が設置された。
- 25) *Règlement de la Société de S.Vincent de Paul*, Paris, Maison Saint-Augustin, 1841.
テキスト全文はインターネットで読むことができる。
- 26) Lavergnée, *op. cit.*, pp.57-59.
- 27) *Ibid.*, p.50-51.
- 28) *Ibid.*, pp.217-218, 220-225. 総会は協会全体の利害に留意する「全体を統括する役員 (fonctionnaires généraux)」によってのみ構成された。パリ会議には地方のコンフェランスは代表を送れなかったので、地方組織からの反発があったが、パリ会議はパリのコンフェランスの集団的利害に関わることがらを取り扱う、という書記長の説明を受けて、規約改正案は了承された。*Ibid.*, pp.222-223.
- 29) *Ibid.*, pp.61, 133.
- 30) *Ibid.*, pp.22-23, 448, 458. パリのコンフェランスの会長 (présidents、副会長、7人の創立メンバーと、団体の起源で基本的な役割を果たした初期の委員会 (commissions) の18人のメンバー、さらにパリ会議 (conseil de Paris) の事務局のメンバーを付け加えた。このようにしてラヴェルネはパリの協会を代表する均質な資料体を作り出したとする。
- 31) 第三共和政初期にカトリックの宗教擁護、とくにカトリック系学校の擁護のために組織された。Cf. Daniel Moulinet, *Laïcat catholique et société française : les Comités catholiques, 1870-1905*, Paris, Cerf, 2008.
- 32) Lavergnée, *op. cit.*, p.19, note 1.
- 33) Albert de Mun, *op. cit.*, pp.11-13.
- 34) Laura Lee Downs, *Histoire des colonies de vacances de 1880 à nos jours*, Paris, Perrin, 2009, pp.85-86.
- 35) サークル (cercle) とはイギリスのクラブを真似た団体 (association) であり、趣味を同じくする者同士が、あるいはただ単に雑談をしたり、飲食をしたり、ビリヤードやトランプなどの遊戯をするために自由意思で定期的に集まった。表向きには政治活動が主たる目的になることはまれであるが、政治的傾向をおびることもあった。
- 36) De Mun, *op. cit.*, pp.59-60.
- 37) *Ibid.*, p.60. cf. Richard Corban, sv., Maurice Maignen; Frère Saint-Vincent-de-Paul (1822-1890), apôtre du monde ouvrier, Pierre Téqui, Paris, 2003, pp.122-130.
- 38) *Ibid.*, p.61.
- 39) *Ibid.*, p.67.
- 40) *Ibid.*, p.70. ド・マンも最初の会合の詳細は覚えていない。サークルのアルシーヴや労働者事業のアルシーヴのなかに探したが見つからなかったと書いている。
- 41) *Ibid.*, p.93. 『誤謬表』は教皇ピウス9世が1864年に公表した近代社会の誤謬のリストであり、その反自由主義的態度はカトリック教会内外で激しい議論的となった。
- 42) *Ibid.*, p.114.
- 43) *Ibid.*, p.103, 118-119.
- 44) *Ibid.*, p.68, 79-80, 125.

- 45) *Ibid.*, p.126.
- 46) Le R. P. Lecanuet, *Les dernières années du pontificat de Pie IX 1870-1878: L'Église de France*, Paris, 1931, p.419.
- 47) 前田更子、前掲書、174頁。
- 48) Levillain, *op. cit.*, pp.219-220, 354, 435-444; de Mun, *op. cit.*, pp.220-226.
- 49) De Mun, *op. cit.*, pp.72, 88.
- 50) Levillain, *op. cit.*, p.355.
- 51) *Ibid.*, p.401, 406.
- 52) *Ibid.*, pp.400-403. 405.
- 53) Molette, *op. cit.*, p.37.
- 54) Levillain, *op. cit.*, pp.661-676.
- 55) Georges Hoog, *Histoire du catholicisme social en France 1871-1931*, Domat Motchrestien, Paris, 1946, p.17.
- 56) *Molette, op. cit.*, p.38-40. ただし、教皇レオ13世は、所在地の司教に従属させることによって事業団を解体させようとはしなかった。生まれつつあるACJFも全国的、国際的次元をもつ。ACJFを奨励する司教も、拒絶する司教も、大目に見る司教もいたのである。
- 57) Levillain, *op.cit.*, p.328.
- 58) Molette, *op. cit.*, p.18
- 59) *Ibid.*, pp.44-45.
- 60) *Ibid.*, p.46-50, 53-54.
- 61) *Ibid.*, p.57-59, 63, 78-79.
- 62) Molette, *op. cit.*, Annex, pp.707-711.
- 63) Jean Lacouture, *Les jésuites: Une bibliographie*, t.2: *Les revenants*, Paris, Seuil, 1991, p.251
- 64) Molette, *op. cit.*, p.35.
- 65) *Ibid.*, p.72, 77.
- 66) *Ibid.*, p.79.
- 67) *Ibid.*, p.80.
- 68) David Colon, *Un cercle d'étudiants catholiques sous la Troisième République: la Conférence Olivaint (1875-1940)*, mémoire présenté pour le DEA "Histoire du XXe siècle", Directeur du mémoire: M.Jean-Pierre Azéma, Institut d'études politiques de Paris, cycle supérieur d'histoire du XXe siècle, 1996, pp.9, 15-16, 18-23. ピエール・オリヴァンは家族の犠牲のおかげでコレージュ・シャルルマーニュで学び、フレデリック・オザナムと友人になり、高等師範学校に入学し、歴史学を専攻し、その後、ラコルデル(Lacordaire)に感化されて、1837年に改宗し、それからSVPのコンフェランスの活動に没頭している。彼は様々なコンフェランス、とくにSVPのコンフェランスの活動に精力を注ぎ、その会長になった。その後、le père Ravignanに惹かれて1847年にイエズス会に入り、1850年に叙階され、1852年にヴォジラール校教師となり、1857年に校長となった。1856年にセーヴル街のイエズス会本部の上長 supérieur de la résidence de la rue de Sèvresに指名され、1871年5月、パリ・コミューンの時に殺害されている。
- 69) *Ibid.*, pp.12-13, 26, 47, 49-51.
- 70) Cf. Aline Coutrot, «Le Mouvement de jeunesse, un phénomène au singulier», Cholvy (éd.), *Mouvements de jeunesse chrétiens et juifs: Sociabilité juvénile dans un cadre européen 1799-1968*, Editions du Cerf, Paris, 1985.
- 71) 前田更子、前掲書、224頁。

注記:本稿は、本学の2009年度特別研究員としての研究成果の一部である。